

社会の変化と問題点

◇ 教育は、社会の変化に大きく影響を受けます。それは、教育の対象となる子どもたちが、社会の中で生きているからです。私が若い頃と比べると、社会はものすごく変わりました。そのため、教育の仕方も当然変えていく必要が出てきました。そのように考えるようになったのは採用10年目くらいからです。その頃から、社会の変化というものを考えながら子どもたちに対応するようになってきました。今回、その社会の変化というものを改めてまとめてみます。

社会の変化とその影響

- ① **高度経済成長を遂げた日本**では、経済的豊かさや生活の便利さが享受されるようになりました。このことは、一面において自ら努力しないでそれに安住する気持ちをもたらしたり、物質主義やその日ののんきに暮らすといった風潮を助長させ、**不健全な欲望を抑える力を減少**させ、また、**物を大切にしたり節約したりすること等の意識を減退**させることにつながったと言われています。これは、**規範意識の低下**等にもつながっているのではないのでしょうか。あわせて、貧しさに耐える教育を難しくさせることにもなったように思います。
- ② より豊かなくらしを求めて、**自然から離れて都市で生活**するようになった人々が増えてきました。このことは、ゆとりや潤いが少ない日常生活につながってしまったように思います。また、大都会は個人の顔や名前が知られにくいため、**青少年が無責任または利己的な行動をしやすい環境**となっていると言われています。ある新聞に、「孤独な群衆」ということが書かれていました。その中で、互いに人間的なつながりを失い、暴力行為などの悪に対しても抗議しない「**迷惑甘受社会**」、悪を黙視する「**許容社会**」へと変化しつつあることが見落とせないという警告が示されていました。
- ③ **情報化の発展**は、氾濫する情報に、青少年が対処できなくなるといった状況を生み出しました。これは、性的な早熟の加速現象の広がりにも深くかかわっているのではないのでしょうか。**社会の変化のスピード化**によって深く考える余裕も奪われ、**落ち着きがなくよく考えないで行動する子どもたち**が増えてきたと感じています。「たくましく生きる人間の育成」が夢物語になりつつあるように思っているのは私だけでしょうか。
- ④ 高学歴社会は、**生活の豊かさ**を生み出した反面、学歴偏重や過度の受験競争等の好ましくない社会的風潮を生じさせ、**こうした風潮に馴染めない青少年の疎外感**を深めることにつながったように思います。ここに、落ちこぼしの問題も関係してきます。こういう状況の中で、「意欲の落ちこぼし」だけは何とか避けたいものだと考えています。
- ⑤ **実社会における体験**がだんだんと少なくなり、社会的に自立することが遅れる傾向が出てきています。大人という年齢に達しているにもかかわらず精神的に大人になれない

男性を指す言葉として「ピーターパンシンドローム」ということが言われるようになってきました。大人にもかかわらず幼児的な犯罪が多くなってきていることも、このことと関係があるのかもしれませんが。

これには、都市の過密化による子どもたちの遊びや運動に必要な遊び場や空地が非常に不足してきていることと、**独り遊び用玩具の急激な普及**が影響を与えているんじゃないかと思っています。バーチャルの世界とリアルな世界の区別を付けづらくなってきている子どもたちに、何らかの手立てが必要なのかもしれません。

- ⑥ 都市化の進行、急激な人口移動によって、**地域住民の間の地縁的な連帯感や地域活動に対する関心**が薄れ、いわゆる地域共同体というものが崩壊の危機にあります。そのため、従来、日常のふれあいとして当たり前に行われてきた**子どもたちに対する地域の教育機能が低下**してきています。これを解消しようとして動き出したのが、コミュニティスクール設置の動きなんですけど、地域力を回復するまでには、まだまだ時間がかかりそうです。

👉家庭の変化とその影響

- ① **核家族化の広がり**、**地域社会の崩壊**などにより、従来、経験豊かな高齢者から伝えられてきた養育上や生活上の知恵が次世代に伝えられにくくなっています。また、「誕生から始まる人の一生を身近なものとしてイメージしにくい状況になってきた」と、ある雑誌に書かれていました。そんな中で、**伝統的な価値観が変化し、また多様化**したことによって、子どもたちが拠り所や目標を持つことができないで、将来において安定した展望を抱くことが難しくなっているんじゃないかと思っています。
- ② 少子化に伴う**過保護**、**過干渉**、**期待過剰**といった**親の養育態度の変化**や、**受験競争の過度の激化**も、子どもたちの**人間関係の希薄化に拍車**をかけています。また兄弟げんかを通じた子ども同士の切磋琢磨の機会や集団の訓練の場や時間等が少なくなっています。このことは、地域においてもしかりで、**地域において仲間集団を形成することが少なくなり**、また、確保することも困難になってきています。
- ③ 親が家庭外で働く世帯が多くなったため、家庭内や身近なところで親の働く姿を通じて**勤労の尊さや厳しさを学ぶといった機会が少なくな**ってきました。また、家庭電化製品の普及による家事の省力化で、子どもたちが**家事手伝いをする機会も少なくな**ったように思います。
- ④ **人生や家庭生活に確固とした見識を持たない親**や、**子どもを指導・教育する自信や自覚の乏しい親**などが、以前に比べると多くなってきたように思います。また、家族間での対話が十分に行われていないと思われる家庭も増えてきているようです。担任時代、そこに担任として何かできることはないだろうかと考えることも多かったように感じています。
- ⑤ **子ども自身の人間形成がその足元からぐらついている**ように感じています。親子が同じ屋根の下で同居していても、人間的な出会いが貧しいのであれば、ヒトが人間に成長することは難しいと考えられています。子どもは下宿人ではないし、親の虚栄心を満足させる「着せ替え人形」でもありません。**家庭生活が消費イメージを異様に膨らませて営まれているとさえ思われる様子**が見て取れます。その上、規範感覚が鈍くて、人間と

して踏み外してはいけないことを示す自信が親になくなってきているのも問題です。

☞学校教育の問題

- ① 学校教育には、「あれもこれも」という状況が必要だと思います。しかし、ここ最近、教育委員会の意向なのか、「**学力向上**」を**唯一目標と考える学校が増えてきている**ように思っています。学校教育が一つの方向に片寄り始めると、子どもたちの個性や多様な能力が十分に引き出せなかったり、画一的な指導のために各教科の指導についていけない児童生徒が生じたりする状況が生まれます。そのことが、**人格の円満な発達に好ましくない影響**を与えるのではないかと危惧しています。
 - ② **生徒指導**というものを、機能ではなく対処療法的な手立てとして捉えられる傾向が未だにあり、その計画の立案や実践に対する学校の教師全員の共通理解や一致協力が難しい状況が続いています。今一度、**生徒指導の機能**を見直してみる必要があると考えます。
 - ③ 大量退職時代を迎え、若い人たちが学校現場に多く配置されるようになり、現場に活気が出てくるようになった反面、**教師の世代差などによって、教育観や価値観の相違**が大きくなり、**教師間の指導の統一性**を確保することが難しくなっているという話をよく聞きます。学校において指導の統一性が得られないと、保護者への不信感につながりますので、注意したいものです。
 - ④ 学校現場への期待が高まるにしたがって、**学校現場の多忙化**につながり、教師が忙しくなっている傾向があります。そのことは、**教師が子どもと向き合う時間を少なくし、子どもたちと教師が人格的なふれあいをする機会が少なくなり、子どもたちと教師の人間関係がつくりにくい状況**につながってきています。その解決方法としてもっとも有効なのは、人員の確保なのですが、その状況にはなかなかいきません。これは、日本が昔から「頑張ればできる」という根性論でやってきた歴史が、人員確保を阻害しているのかなと思っています。
 - ⑤ 学校というところは、あえて多種多様な人間を集めて成り立っているところです。つまり、「**学校は小さな社会**」といわれる所以でもあります。なので、学校の存在価値は「他者との共存」であると考えます。ここに、**間違っただ個性観を取り入れる先生が増えてきている**ように思います。その考えがそのまま子どもたちにうつり、子どもたち同士の**遊びや友人関係を通じた友情、協力等の社会性を身につける機会を指導できなくなっている先生が多くなっている**のも心配です。
- ◇ 社会、家庭、学校と3つに分けて、あえてその変化によるマイナス面に視点をあてて、私の独断でまとめてみました。こういう大きな変化の中で、私たちは教育に携わっています。このような社会だからこそ、そうならないために、どう考えて、何をしたらいいのかじっくりと考えてみる必要もあるのではないかと日々感じています。私は個人的に、これら多くの問題は学級経営や特別活動の充実でかなり解消していけるのではないかと、勝手に考えていますが、いかがでしょうか。

文責：スギタ